

周防亮介さん(ヴァイオリン)応援レポート

バッハからコンテンポラリーへ B→C

2017年11月14日(火) 19:00開演

東京オペラシティ リサイタルホール

東京オペラシティのB→C (バッハからコンテンポラリーへ)シリーズに周防さんが登場。「バッハと現代曲を含む」という条件の下で周防さん自身が選曲し、プログラムしたリサイタル。この日は一度は挑戦したいと考えていた自身初のオール無伴奏リサイタル。

当日のフライヤーには、「ヴァイオリンでこんな音がでるの?こんな表現ができるなんて!といった発見や面白さを感じていただきつつ、無伴奏ならではの空気感や計り知れない可能性を味わってほしい。」とある。周防さんにとっても挑戦であり、様々な思いのこもったリサイタルだった。

<演奏会概要>

◆プログラム

- シュニトケ: ア・パガニーニ
 バルトーク: 無伴奏ヴァイオリン・ソナタBB124
 尹伊桑: 大王の主題(1976)
 J.S. バッハ: 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第3番
 ハ長調 BWV1005
 イザイ: 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第5番
 ト長調 op.27-5

◆アンコール曲

タレガ(R. リッチ編): アルハンブラの思い出

NISSAY MUSIC GALLERY
 東京オペラシティリサイタルシリーズ
 TOKYO OPERA CITY RECITAL SERIES
B→C 196
 バッハからコンテンポラリーへ

2017/11/14 火
 19:00開演 18:30受付
 東京オペラシティリサイタルホール
 THE OPERA CITY RECITAL HALL
 TOKYO OPERA CITY, NEPAUL HALL

初めまして、期待される
 素晴らしいヴァイオリニストのひとり。
 いま最も期待される
 素晴らしいヴァイオリニストのひとり。
 初めまして、期待される
 素晴らしいヴァイオリニストのひとり。

周防亮介 ヴァイオリン
 Ryouzuke Suho, Violin

シュニトケ	ア・パガニーニ(1992)
バルトーク	無伴奏ヴァイオリン・ソナタBB124
尹伊桑	大王の主題(1976)
J.S. バッハ	無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第3番 ハ長調 BWV1005
イザイ	無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第5番 ト長調 op.27-5

チケット料金 3000円 (税込) 1席
 6月(月) 全席
 6月(日) 全席
 6月(日) 全席

●お問い合わせ先
 東京オペラシティリサイタル事務局
 〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
 TEL: 03-5561-0000 FAX: 03-5561-0001
 E-MAIL: info@opcity.jp

2017/11/14 火 19:00開演 18:30受付
周防亮介 ヴァイオリン
 Ryouzuke Suho, Violin

シュニトケ ア・パガニーニ(1992)
 バルトーク 無伴奏ヴァイオリン・ソナタBB124
 尹伊桑 大王の主題(1976)
 J.S. バッハ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第3番 ハ長調 BWV1005
 イザイ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第5番 ト長調 op.27-5

message

幸ひはご来場いただきまして誠にありがとうございます。
 いくつかオール無伴奏のリサイタルをしてみたいと思いましたが、無伴奏には大きな困難となり演奏することから遠ざかっておりましたが、B→Cシリーズのお話を聞いた瞬間、無伴奏はひとつに決まらせて下さることにいたしました。

私は無伴奏の独特な空気感と楽器の輪の広さにとっても魅力を感じています。
 たった一歩のヴァイオリンから伝わる様々な音色、そしてそれ以外の音の個性を細くしめたいわけは無いのです。

これから無伴奏の世界に一緒に歩みを始め、全ての音を聞き終えた後には自分自身も音楽家も音楽家として成長したことの喜びや感動を味わうことができるとを願い、心を込めて演奏いたします。

周防亮介

(当日のプログラムと周防さんのメッセージ)

(当日のフライヤーより)

この日のリサイタルに向けた周防さんの意気込み、プログラム、演奏等についてご本人に直接お聞きしたところ、周防さんの思いがよく伝わる、とても丁寧な回答をいただきました。

自分自身の音楽に対する探究心がひしひしと伝わってきます。必読！！

Q1. 周防さんがヴァイオリンを始めたきっかけは何ですか。ヴァイオリンに惹かれて、ずっと続けてこられた理由は何でしょうか。

A1. 小さい頃からクラシック音楽が好きで、家にあるCDを聴いたりピアノを触っていたようですが、5歳の時に子供向けのコンサートに連れて行ってもらい、休憩時間の楽器体験コーナーで初めてヴァイオリンを触らせてもらったのがきっかけです。そこから一気にヴァイオリンの音色と華やかさに強く惹かれて、どうしても習わしてほしいと両親に頼みました。

ずっと続けてこられたのは、やはり音楽とヴァイオリンが好きなこと、そしてご指導くださる先生方や周りの環境に恵まれたことが一番大きいと思います。

Q2. 10月からスイスのメニューイン国際音楽アカデミーに留学されているそうですが、環境が変わり、自分自身に、また自分の音楽にどんな変化が起きつつありますか。

A2. 留学をしてまだ2ヶ月目です。初めは全てのこと新しいことだったので緊張も不安もありましたが、16人しかいない学校なので皆とても仲が良く親切なので、いろいろ助けてもらいながら随分こちらの生活にも慣れました。

メニューイン国際音楽アカデミーはとにかく演奏会が多いのでソロはもちろんのこと、室内楽や弦楽合奏の曲を仕上げている中でお互いの意見や考えを言い合いながら取り組めるところはすごく楽しいですし、一緒に演奏する中で外国の方の心から音楽を表現する力にとっても刺激をもらっています。

またこちらで生活する時も演奏する時も、いろいろなことに積極的にアピールしていくことも必要なことだと日に日に感じています。



(周防さんが学んでいるメニューイン国際音楽アカデミー)

Q3. 今日は初のオール無伴奏リサイタルということでしたが、準備は大変でしたか。今日の演奏は如何でしたか。

A3. 今回のプログラムは正直なところとても大変でした。プログラムを決めた時は弾きたい曲を選んだのでそれほど思わなかったのですが、公演が近づくにつれて「どうしてこんな大変なプログラムを組んでしまったんだろう...」と少し後悔するくらいでした(笑)

練習過程の中では壁にぶつかりそうな時もありましたが、自分で考えいろいろなことを勉強し、練習を重ねて乗り越えられた今はとても充実感があります。

大阪と東京のどちらの公演もお客様が凄い集中力で聴いてくださり、無伴奏の世界に自分自身も入り込みやすく、とても集中していましたし、今出せる精一杯の演奏ができたのではと思っています。

そして東京公演では日本で師事している小栗まち絵先生、原田幸一郎先生、大谷康子先生の三人の先生方がお越し下さったことも本当に嬉しかったです。

またいつかオール無伴奏リサイタルをやってみたい気持ちはありますが、いまは少し期間を空けたいと思っています(笑)

Q4. 無伴奏がお好きで、これからも無伴奏に挑戦していきたいとおっしゃっていましたが、室内楽や協奏曲と異なり、無伴奏の魅力、楽しさ、難しさはどんなところにありますか。

A4. 無伴奏の一番好きなところは自分をさらけ出すことができることです。

無伴奏というと孤独、不安、嘆きなどの負の言葉を連想する一方で、とても自由に歌い躍動する様子を思い起こします。

そういった人間の持つ様々な感情のエネルギーを表現できる形態であり音楽であることが最大の魅力だと思っています。

今回もちろん作品の形式や作風を尊重した上で、どの作品も自由に歌い語るということをひとつのテーマにしました。

作品の弾き分けというのは大切なことですが、まずは自分が思うままにパレットにいろいろな色や形を広げていき、そしてそれを納得いくまで繰り返し構築していきました。

特にスイスに行ってから頭の中は無伴奏の曲のことばかり考えていたので、普段食事をしている時、お風呂に入っている時もアイデアがふと浮かんでくるが多々ありとても面白かったです。

また、たった一本の楽器からは考えられないほど表現において無限の可能性を秘めていて、そこには宇宙的な空間が広がっているように思います。

そしてお客様にも奏者の息づかいや弓が弦に触れる時のちょっとした音なども感じていただくところもひとつの魅力だと思います。



(演奏後の満足そうな周防さん)

Q5. 今日の選曲はご自分でされたとのことですが、こういった理由でこれらの曲を選ばれたのですか。プログラミングでは、曲から曲の流れにこだわったとありますが、何を軸にプログラミングされたのですか。

A5. B→C「バッハからコンテンポラリーへ」ということで、プログラムの中に必ずバッハとコンテンポラリーの作品を入れなければいけないのですが、まずはオール無伴奏リサイタルにすることに決めて、それから曲を考えていきました。

無伴奏ということで、前にも述べたように人間が持つ様々な感情が揺れ動く様子を五曲を通して表現したいと思いました。

(次ページへ続く↓)

♪番外編♪
メニューイン国際音楽アカデミーでの
リハーサルの様子



(写真はご本人より)



まずシュニトケは曲の冒頭から不気味な雰囲気の中、無伴奏の世界へと導き、ものすごい緊張感が曲全体を支配しています。

その緊張は緩まることなく二曲目のバルトークへと渡り、まだそこにも緊迫した様子や叫び、嘆きなど負の感情がほぼ占めている中で、音と音の間にかすかに希望や憧れというワードも思い浮かびます。

ユン・イサンはバッハの「音楽の捧げもの」のテーマが冒頭で現れてそのテーマが次々に展開していくので、このB→Cというバッハからコンテンポラリーの道筋を垣間見れるように思いました。あらゆる展開をした後、始めのバッハのテーマに戻り落ち着き、次のバッハのソナタ三番に続きます。

バッハのソナタはハ長調ということで平和的で安らぎがあり、ここへくると感情は穏やかになり時に歌い時に躍動します。

そして最後のイザイではト長調の開放的な響きで始まり、それまでの負の感情から全て解放されて、二楽章「田舎の踊り」では幸せに満ちていて、高まる気持ちのまま踊る様子が描かれているように感じたので、これらの曲を通して人間の感情や気持ちの変化を意識して選曲しました。

この日、周防さんのファーストアルバム「SOUVENIR」が、11月22日の発売予定に先駆けて先行販売されました。初ファーストアルバム発売、おめでとうございます!!



Q6. 他のヴァイオリニストと差別化するとしたら、今後どんなヴァイオリニストになりたいと考えていらっしゃいますか。

A6. 自分の強みは「音」と「色」だと思っています。

曲のスタイルなどは尊重しつつも自分にしかできない表現や音にこだわりながら、多くの素晴らしい作品を伝えていける演奏家になりたいと思います。

また、自分の生き様が全て音に表れると思うので、人としても何か魅力溢れる生き方をしていきたいと思っています。

それらが上手く合わさり、聴いてくださるお客様の心を揺さぶることのできる演奏家になれば本当に幸せなことです。

「無伴奏の一番好きなところは自分をさらけ出すことができるところです。」そして、「自分の強みは音と色だと思っています。」という周防さん。自分の個性と、自由に歌い語るヴァイオリン演奏が絡み合い、独特の世界が生まれるのかもしれない。どんな世界を創り上げていくのか、これからが楽しみだ。

「今回の曲は難しい曲ではあるが、乗り越えればまた一つ成長できると思う。」と語っていた周防さん。前向きで意欲的な挑戦を経て、また一段階段を登り、自信につながったはずだ。